



TOHOKU  
UNIVERSITY

# Volunteer Seminar Journal

## Vol.5 2013 Summer



3年目のいま、  
学生にできること



001 陸前高田ボランティアツアー

003 スタディツアーレポート

巨理山元スタディツアー、石巻スタディツアー、ふくしまスタディツアー

005 ボランティア支援室の活動

007 教員からのメッセージ

東北大学東日本大震災学生ボランティア支援室 コーディネーター 藤室玲治

## 陸前高田市で知る3年目の被災地

東北大学東日本大震災学生ボランティア支援室（以下、支援室）では、神戸大学と共催で、主に陸前高田市を拠点として、大船渡市や気仙沼市なども対象とし、仮設住宅や地域の集会所で足湯や手芸のサロン活動を行う陸前高田ツアーを計6回実施しています。このツアーで見聞きした3年目の被災地の状況と、現地で私たちにもできることを紹介します。

### 足湯・手芸カフェで訪問する仮設住宅



**【足湯】** お湯に足をつけてもらい、手をもみほぐす。1対1で向きあう中で、日々のストレスや震災時の辛い思いなどをお聞きすることも。



**【手芸】** タオルで「まけないぞう」というお手拭きを「かわいい、かわいい」と言いあいながら作る。まけないぞう作りを副業としている方もいる。

陸前高田ボランティアツアーでは様々な内容の活動を行っていますが、基本となるのは仮設住宅等で開催する「足湯・手芸カフェ」です。仮設住宅や地域の集会所で地域の方と学生の交流の場を設け、楽しいひとときをすごします。被災後3年目をむかえた陸前高田市では、多くのボランティア団体が撤退し、このような仮設住宅でのサロン活動が減っています。

一方で、長引く仮設住宅生活により、心身の疲労を深めている被災者の方々も少なくありません。津波によって突然に家やご家族を失い、以前と違う生活を強いられるようになったことにストレスを感じ、その上、地域の復興や、自分の生活再建の見通しが立たず、希望を失っている方もいます。

そうした方々から、足湯や手芸を通して、様々な「つぶやき」をお聞きします。外部から来た私たちにだからこそ、話してくれる「本音」もあります。

こうした「つぶやき」をヒントに、新たな活動を始めるときもあります。また、現地の支援団体に、つぶやきからくみ取れる被災者のニーズをつなげるときもあります。何より、こうしたお話を聞かせていただき、被災された方々の心の重荷をほんの少しでも軽くできればと願っています。

### 被災された方の「つぶやき」

元高田市街は建物の取り壊しが進み、ランドマークが無くなってどこを歩いてるかわからなくなった。寂しい。

復興のめどが立たない、見えてこないのでやる気が萎える、もどかしい。

高田を離れたら便利だけど、やっぱり高田を離れたくない。

毎日布団を敷いて、寝て、起きて、布団をしまって、また敷いての繰り返しだよ。

## 陸前高田ツアーでの多様な取り組み

陸前高田ボランティアツアーでは、仮設住宅以外でも、様々な活動を行っています。3年目の被災地で、私たちにできることは、たくさんあります。

### ○子供企画

遊び場をなくした子供達と遊ぶ！

### ○農業支援

震災以前農家を営んでいた方の生きがい作りに

### ○漁業支援

被害の大きかった牡蠣やワカメの養殖の手伝いなど

### 【地元の方のお話】



### ●地元の方のお話

被災地で震災当時の経験を伝え続けている人たちがいます。

釘子明さんは、陸前高田市で震災の様子を伝え、減災意識を啓蒙する語り部の仕事をしています。災害が起こったとき、どうすれば命を守れるのか？どうすれば災害時の被害を減らせるのか？実体験をもとに、次の震災被害を未然に防ぐための意識の重要性を説いています。

このツアーの最大の特徴は、様々な立場の人と意見を交わすことができることです。被災者の方々、震災当時に避難の指揮をとった方、ボランティアに参加している学内外の学生など、それぞれが自分の立場や状況によって違う意見を持っています。もし、「被災地のために何かしたい。でも何をしたらいいかわからない。」というモヤモヤした気持ちを抱えている人がいたら、ぜひ多くの人の意見を聴きにきてください。そうすれば、自分に何ができるか、何をしたいのかがはっきりするかもしれません。

## ツアー参加者の声

ボランティアの人などが来ている時は外に出て話をしたりしているが、いなくなると家で一人でテレビを見て過ごしたりしているという人がいました。ボランティアがいなくなっても、近所で気軽に集まって話などができるようになるまでのきっかけ作りができたらいいなと思いました。

「自分が住んでいる地域の避難場所に行ったことがありますか。その避難場所が安全かどうか考えたことがありますか。」と釘子さんに尋ねられた時、私は、はっとさせられました。私は仙台で自分が住んでいる地域の避難場所がどこにあるかも知りませんでした。自分自身の防災意識の低さを痛感し、「私は経験したから言えるんです。」という釘子さんの言葉にとっても重いものを感じました。



【農業支援】

### ●防災ワークショップ

消防、交通、水害等の地域防災について、地域の人達と学生が集まって小グループごとに議論し、発表を行います。また、この時挙った意見は市へ提出し、今後の防災に役立てます。

詳しい情報は web サイトをチェック！

<http://kataribe-kugikoya.com>

新着情報は Facebook

“陸前高田被災地語り部”くぎこ屋”のページにアップされています。

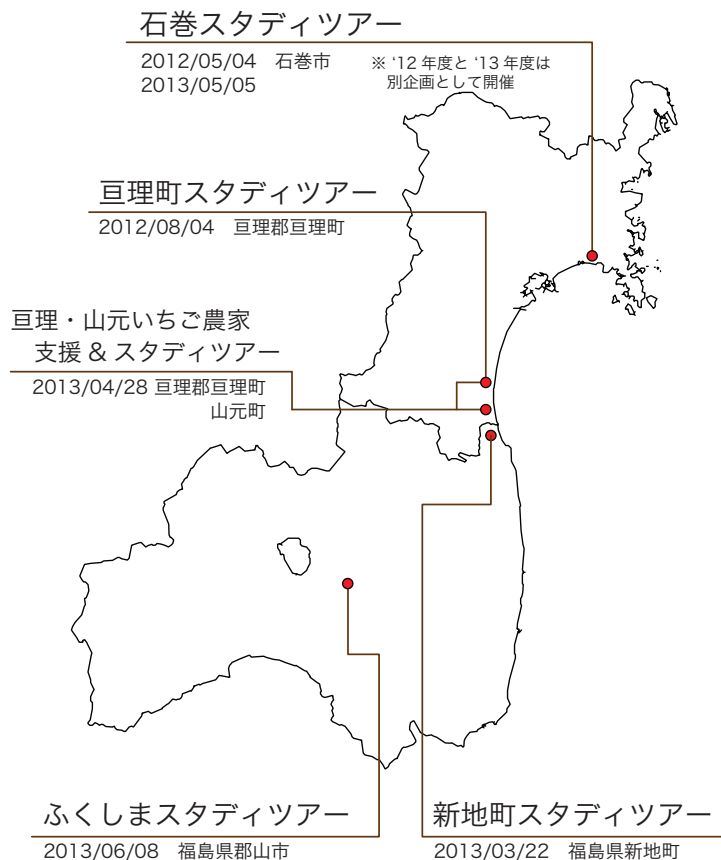
# スタディツアーレポート

## スタディツアーとは

スタディツアーは、被災地を訪れて地震や津波の被害を目で見て学んだり、住民の方、または復興に携わる方からお話を伺ったりするなどして、震災および復興について考えるというツアーです。

支援室は、本学の学生を主な対象として、東日本大震災について認識を深めると同時に震災復興ボランティアへの意識を喚起することを目的とするスタディツアーを継続的に開催しています。これまでにスタディツアーに参加した東北大学生は、延べ170人になります。

“被災地”とひとくくりに言っても、復興への進み方や地域の抱える課題はそれぞれ異なります。スタディツアーは、今後もさまざまな地域で開催していく予定です。



## 亘理・山元 いちご農家支援&スタディツアー

2013年4月28日 宮城県亘理郡亘理町・山元町



平成25年4月28日(日)亘理・山元いちご農家支援&スタディツアーが開催され、41名の学生が参加しました。

本ツアーは、山元町にある半澤いちご農園でのいちご狩り体験や、山元町沿岸部の視察、亘理中央公民館で復興を考えるワークショップを行うという内容でした。いちご農園経営者の半澤さんは、ボランティアの方々と協力しながら震災の被害を受けたいちごハウスを少しずつ建て直して農業を続けており、ツアー当日は学生たちに実際の被災体験を語っていただきました。また、ワークショップの際には、一般社団法人「ふらっとーほく」の松島宏佑さんに復興やボランティアについてお話しいただきました。全体の活動を通して被災地の現状を知った上で、これからの復興に繋がる行動とは何なのか、改めて考えるきっかけとなった1日でした。

## 参加者の声

いちご狩りの経験が初めてでとてもうれしかったし、この行為が少しでも復興支援につながるのだと思ったらさらにうれしかった。 文学部1年

復興に終わりはないという言葉が印象的で、心に響くものがありました。 経済学部4年

今日見たり、聞いたりしたことを他の人達に話したいと思う。 理学部3年

## 石巻スタディツアー

2013年5月3日 宮城県石巻市



平成25年5月3日(金)石巻スタディツアーが開催され、26名の学生が参加しました。

本ツアーでは、石巻市街を一望できる日和山や、門脇地区を訪れて津波による被害状況を見学しました。そして、市内にある大橋仮設住宅を訪問して住民のみなさんと交流し、そこでボランティア活動をしているNPO法人「み・らいず」の田口裕也さんにお話を伺いました。また、市街の中心部にある「ふれあい商店街」や「復興マルシェ」の散策を行い、震災時の「壁新聞」で知られる石巻日日新聞社がつくった、震災以前の街のようすや壁新聞の実物、震災後の写真などを展示している博物館「石巻ニューゼ」を見学した後、参加者全員でグループディスカッションを行うというバラエティ豊かなツアーでした。被災地の現状や震災ボランティア、地域の街づくりなど様々なことが学べる機会となりました。

### 参加者の声

仮設住宅にお住まいの方や新聞記者の方や商店街の方など、様々な方から話を聞けて、石巻の現状を知ることができました。 理学部1年

街は思ったよりキレイだったが、心のケアなどの目に見えない課題もふくめて、復興までの道のりは長いと感じた。 経済学部3年

今回のイベントで学んだことをもとに、より考えたり、さらなる行動をとったりしようと思った。 文学部3年

## ふくしまスタディツアー

2013年6月8日 福島県郡山市



平成25年6月8日(金)ふくしまスタディツアーが開催され、29名の学生が参加しました。

まず、郡山市富田町仮設住宅内にある生活復興支援センター「おだがいさまセンター」を見学しました。こちらの施設は放射能被害により双葉郡富岡町から各地域に避難している町民に向けて、情報提供や生活支援を行う拠点となっています。この施設がある仮設住宅にも富岡町の町民が多く住んでおり、そこの住民の方たちと足湯などを通して交流しました。その後、郡山市音楽・文化交流館「ミュージカルがくと館」に移動して、NPO法人「コースター」代表理事である岩崎大樹さんから、福島でのこれまでの復興支援活動や現在の福島に必要なことについてお話を伺いました。最後に、復興支援に取り組む福島の学生たちとも交流し、学生同士でワークショップを行いました。1日を通して福島の実情を垣間見ることができたツアーとなりました。

### 参加者の声

福島の被災者の方々がおかれている複雑な現状を知ることができました。 文学部1年

自分があまりにも被災地の情報や知識を持っていないことに気づかされた。 教育学部3年

実際に被災地の方々と話す中で、あまりニュースや報道などから聞くことのできなかった生の声に触れられてとても勉強になりました。 工学部2年

## ボランティア支援室の活動

東北大学東日本大震災学生ボランティア支援室は、東日本大震災により被害を受けた地域の復興支援のため、ボランティア活動を行う学生を支援するという目的のもとに設置された組織です。

支援室では学生アシスタントが中心となり、ツアーやイベントの企画運営、広報業務などを行っています。学生アシスタントの仕事に興味をお持ちの方は、是非ご連絡ください。

## 2013年のイベント・企画

### スタートアップフェア



平成 25 年 4 月、当支援室は東北大学川内北キャンパスにて「震災ボランティアスタートアップフェア」を開催いたしました。

本企画は昨年の 4 月から継続的に実施しているもので、震災ボランティアに関心を持っている本学の学生に対し、学内外のボランティア団体の担当者が直接活動の紹介を行ったり、相談を受け付けるという対話型の企画です。4 月は平日の放課後に計 6 回実施し、参加団体は計 15 団体・来場者は延べ 170 人以上と過去最大規模のイベントとなりました。

今回のスタートアップフェアでは、東北地方以外の出身の新生が多く参加し、意欲的にボランティアの活動について知ろうとする姿が目立ちました。

参加者アンケートでは「情報が集められていて有意義だった」「参加しやすい雰囲気良かった」などの声が寄せられました。

### 基礎ゼミ 「震災復興とボランティア活動」



東北大学では、平成 25 年度の基礎ゼミとして「震災復興とボランティア活動」を開講しています。本講座は、ボランティア活動に参加し、東日本大震災から 2 年が経過した被災地の現状を認識するとともに、ボランティアツアーの企画立案を自ら行うことを通じ、学生が震災復興に対しどのような立場で携わることができるのか考察を深めることを目的とする、1 セメスター（半期）の講座です。

支援室は、ゴールデンウィークツアー（P2-5 を参照）に受講生を受け入れたほか、受講生による企画立案のアドバイザー役として学生アシスタントが基礎ゼミに参加し、サポートを行っています。

また、8 月以降には、基礎ゼミの受講生が考えた企画を支援室主催のボランティアツアーとして実施する予定です。詳細は支援室の公式サイトにて順次お知らせしますので、奮ってご参加ください。

## 支援室登録団体制度のお知らせ

支援室では、審査の結果、登録団体として認められたボランティア団体に対して、以下のような活動支援を行っています。

- ・川内南キャンパス「ボランティアルーム」(右写真)の貸し出し(※学内団体のみ)
- ・スタートアップフェア等のボランティアイベントへの参加
- ・メーリングリストや学内の掲示板等の支援室の媒体を用いた、団体の活動情報の告知・広報



2013年7月現在、学内団体4団体、学外団体15団体が登録されています。

団体登録の申請手続きにつきましては、学生支援課 022-795-7818 までお問い合わせください。

## リレーコラム：支援室の人々

僕は支援室のゴールデンウィークツアーで ReRoots さんの活動に参加させていただき、まだまだボランティアが必要なことを痛感しました。そのため、少しでも多くの人々がボランティアに参加するきっかけをつくることで、ボランティアが必要な地域の助けになることが出来たらと思い、ボランティア支援室に入りました。

僕の出身の大分県では、東北の情報は自発的に見ようとしない限り知ることが難しくなっており、恥ずかしながら僕は、仙台に来て震災の



爪痕を見るまで、復興作業はほとんど終わってしまっていると思っていたほどです。

今後の抱負としては、できるだけ多くのツアーを企画し、より多くの人にボランティアに参加してもらい、復興の役にたったり、現在の被災地の状況を知ったりしてもらいたいです。また、出来るのであれば、九州などの離れた地域からもボランティアに参加してもらえようになりたいと思っています。

(工学部1年・日隈友也)

## 夏休みツアー企画のお知らせ

ボランティア支援室では、夏休みにもツアーの開催を予定しています。

いずれのツアーも、震災の被害や復興の取り組みを学んだり、実際にボランティアに参加するだけでなく、他の参加者と交流する機会ともなるでしょう。さまざまな企画を用意しておりますので、是非ご参加ください。最新情報は、支援室公式サイト内特設ページにて公開中です！(右下QRコードからもアクセスできます)

### 【スタディツアー】

8/19(月)~21(水) 仙台&宮城沿岸部・見どころめぐりツアー

他大学生と共に宮城の観光名所と被災地を巡り、震災の影響について学びます。

9/12(木)~14(土) 福島スタディツアー

原発事故が人々の生活に与えている影響や、現在行われている支援の取り組みを学びます。

9/24(火)~25(水) 復興まちづくりスタディツアー-IN雄勝

まちづくりに関わる様々な方に話を伺い、復興の課題と展望について学びます。

### 【基礎ゼミ企画】

8月以降、複数のツアーを実施します！

日程等、詳細は公式サイトをご確認ください。

### 【ボランティアツアー】

8/7(水)~11(日) 陸前高田ボランティアツアー(A日程)

他大学生と共に、仮設住宅にお住まいの方との交流や、子育て・学習支援、泥出し・農業・漁業支援を行います。7日夜には伝統行事「うごく七夕」に参加します！

9/4(水)~7(土) 陸前高田ボランティアツアー(B日程)

七夕への参加を除き、A日程の活動と同様です。

最新情報はこちら↓



# 教員からのメッセージ

## 「3年目の被災地に希望を届けるボランティア」

東北大学東日本大震災学生ボランティア支援室  
コーディネーター・特任准教授 藤室玲治

(ふじむろ れいじ 神戸大学大学院修了。神戸大学勤務を経て2013年より現職。)



### ■3年目の被災地

今、東日本大震災の被災地は「3年目」を迎えています。被災地の津波浸水域には、いまだに荒涼たる景色が広がっています。また多くの被災地では復興住宅への入居が本格的に始まるのは2014年度以降、高台への移転などは2015年度以降になる見込です。復興はこれからなのです。

一方で、被災地外では、急速に大震災が忘れられつつあるように思えます。2年を節目に撤退してしまったボランティア団体や支援団体も多いのですが、それは「もうボランティア活動をする必要が無くなった」ということではありません。

自宅を失って、仮設住宅や「みなし仮設住宅(注1)」などに住んでいる被災者の方々の中には、この3年間で疲労の度を深め、生活再建の希望を失っている方々も大勢おられます(注2)。こうした方々に、ボランティアは何ができるのでしょうか？

### ■希望が生まれるボランティア

私は「被災した人とのコミュニケーション」を通じて相手に希望を届けることが、ボランティア活動の本質だと思っています。被災地のある旅館で「若いボランティ

アが一生懸命に片づけをしてくれて、それで、もう高齢なので廃業を考えていたのを、思いとどまった」というお話を聞いたことがあります。また、学生による仮設住宅でのサロン活動を1年間行った後に「1年前に、知らない人ばかりの仮設住宅に入居した時に、あなた方に会ったから、今まで生きようと思えた」と語ってくれた方もいます。

ボランティアが直接に被災した人々と顔をつきあわせ語り合う、その中に「なんとか相手に寄り添いたい」という真摯な気持ちがこもっていれば、それだけでも被災した人々の希望につながります。

### ■「忘れていない」というメッセージ

「3年もたってやることあるだろうか」「自分に何かできるだろうか」「かえって、被災した人の迷惑になるのでは」と考えて、被災地や被災した人々のことが気になりながら、行動に移せない方々もいると思います。しかし、被災地では、仮設住宅でのサロン活動や、農業や漁業の支援、その他、地域振興のための活動など、皆さんにできることはいくつもあります。

何より、若い皆さんが一人でも多く被災地に行くことが「大震災を忘れていない」というメッセージを届けることとなります。

私は阪神・淡路大震災があった神戸出身です。神戸でも3年目には、外部から来たボランティアの撤退や世間の関心の低下がありました。そうした折、ボランティアが来てくれると「わたしたちは忘れ去られていない」と感じて、勇気づけられました。

この夏、支援室では被災地の実情を学んだり、実際に活動を行うツアーをいくつも準備しています。ぜひこれらのツアーなどを利用して、被災地に行ってみてください。そこに、みなさんにとっても、被災された方々にとっても、希望につながる出会いが待っています。

注1) 東日本大震災では、プレハブの仮設住宅供給が追いつかず、国や地方自治体が民間賃貸住宅を借り上げ、被災者に提供した。これが「みなし仮設住宅」で、東日本大震災において提供された応急仮設住宅は最大約14万戸であるが、うち約半数はこうした「みなし仮設住宅」である。

注2) 1995年発生の阪神・淡路大震災や、2004年発生の新潟県中越地震では、3年目の仮設住宅で自殺の増大等が報告されており、東日本大震災の被災地でも3年目に自殺や孤独死が増大することが懸念されている。

## Volunteer Seminar Journal Vol.5 2013 Summer



発行日 平成25年(2013年)7月30日

発行者 東北大学東日本大震災学生ボランティア支援室  
(教育・学生支援部学生支援課内)

〒980-8576 仙台市青葉区川内41

電話 022(795)7818

公式サイトへはこちらからアクセス！→  
<https://sites.google.com/site/voltohokuuniv/>



©2013 Tohoku University Printed in Japan